

はじめに

説教作成や分級準備の第一歩は、先ず、与えられたテキストを何度も読むことから始まります。複数の翻訳を読み比べることができたらなお幸いです。神が語っておられること、自分への励ましや戒め、子どもたちにも分かち合いたいことが、ぼんやりでも見えて来られたでしょうか。そのときこそ、テキスト研究やカテキズム研究を開いてみてください。自分が、テキストで語られているメッセージを正しく（教会の伝統、つまり信仰告白に即して）解釈できたのか否かを問うことは、とても大切です。また、新しい気づきを与えられるかもしれません。いずれにしろ、自分自身が、子どもたちへのメッセージをきちんと聴き取ること、つかむ事が要です。それは、御言葉を深く黙想することによってもたらされるものです。この練習を深めてまいりましょう。

テキスト研究（神の語りかけと地の文）

24節以下、第六日目には、動物と人間の創造物語が記されています。動物は、「それぞれの生き物」（口語訳、新改訳では「それぞれ」を「種類にしたがって」と訳しています。）として創造されます。ところが、人間の創造は、まさに際立つものとなっています。神は、「我々にかたどり、我々に似せて」造ろうと決意されたからです。直訳的に言えば、「神の形態・イメージで、神の模造・コピーとして」造ろうとなるでしょう。つまり、神との関係性において、しかもあまりにも近く関係している存在として創造されていることが明らかにされます。ここに被造物における人間の唯一性（ユニークさ）、尊厳の根拠があります。「神の像」という神学の言葉で言い表される問題です。

ここでも繰り返されているのは、両者とも、他の被造物同様、神の御言葉によって創造されているという点です。しかもそこでこそ、際立つのは、言葉を発する神にかたどられた人間は、この言葉（命令）を理解する存在たりえるということ

です。また自ら言葉を持つ存在であることも示されています。つまり、理性的存在として、世界を認識する能力を与えられました。それだけに、被造物を「支配する」責任が人間だけに付与されました。支配の方法とは、神のなさり方、つまり、愛をもって管理するという仕方です。

地の文は、神にかたどられて創造された人間は、「男と女」とであると記します。言うまでもありませんが、神に男性、女性の区分があるわけではありません。「我々に～」とは、さまざまな解釈の歴史がありますが、神の熟慮に基づく決意の表現との理解があります。いずれにしろ、父と子と聖霊の三一の神は、交わりの神であって命の根源、つまり相互に愛の絆で結ばれ、決して離れることのない一人の神です。そして、もともとの人間は、男と女として、つまり、相互に交わりを持ち、愛の絆で結ばれ、一体の存在（2:24参照）とされ、子どもを授かり、命を継承する存在として、祝福の内に創造されました。人間は、「極めて良かった。」と評価されるように、被造物の冠、傑作なのです。

黙想

私どもは、説教の言葉をつむぎだします。私どもは、神の像として、神の言葉（命令）を理解し、自ら言葉を語れる存在なのです。言葉とはもともと、神との交わりをなす手段です。また、男と女、つまり人間相互の交わり的手段にも応用されるのです。ところが今、言葉の本源的目標は、すっかり見失われてしまいました。神との交わり的手段、祈りの言葉を喪失しているのです。それが、人間の尊厳性の喪失と深く結びついています。ことばの真の回復とは、祈りの回復です。人間の尊厳、すばらしさは、神礼拝（祈り）によってこそ認識させられます。人間が人間となるために、神を神とする礼拝の回復、神との交わり（祈り）の回復を子どもたちと共に求めてまいりましょう。

（相馬伸郎）

子どもカテキズム

問15 神さまは人間をどのように創造されましたか。

答 神さまは、人間を神さまのかたちに似せて、男の人と女の人として造られました。

土のちりから造り、神さまのいのちを吹き入れてくださいました。

こうして、人間はただの動物ではなく、神さまとの交わりを持つものとされました。

ですから、人間にとって生きるとは、神さまを礼拝すること、お友だちを愛することです。

参考教理問答 ウェストミンスター小教理問答 問10

ハイデルベルク信仰問答 問6

〈人間は霊を持つ〉

神様は天地万物を創造され（問12）、その最後に人間を創造された。この人間の創造において特に心に留めるべきことがある。一つは神様のかたちに似せられたという他の動物にない特徴である。もっとも、「神のかたちに似せる」とは人の顔や形が神に似ているという意味ではない。霊である神様から命の息（霊）を吹き入れられたことにより、人間も霊を持っている（創世1:27）ということである。それは併せて、人は神様との交わりを持つことができ、また神様との交わりに生きるべき人格的な存在であることをも意味する。だから人間は神様を礼拝して生きることが必要なのである。

〈互いに違う人間同士が愛し合って生きる〉

もう一つは人間が男と女に造られたということである。神様は最初に男を造られたが、「人が独りであるのはよくない」（創世2:18）、つまり不完全であると判断され、助け手として女を創造された。聖書で「助け手」という言葉は「主はわたしの助け手」（ヘブライ13:6）という形で使われるように、自分単独ではどうにも埋められないところを補う必要不可欠な存在という意味を持つ。よって男と女が共同で担い互いに助け合う関係に立って生きることこそが、神様が人間に求められる生き方ということになる。そしてひいては友達をはじめ周りの様々な人々を愛し、共に手を取りあって進むことが望まれている。

〈人は土のちりから造られた〉

人間が土のちりから造られた（創世2:7）ことは、人間が「神のかたちに似せられた」という他の被造物にない特徴を持つからといって他の被造物を過度に見下しおごり高ぶろうとすることを戒め、人間もまた、他の被造物と同様に土からなり、土から生ずる産物に依存して生きる点で共通することを教える。この点は環境破壊の進行によって様々な危機に直面している現代において改めて心しなければならない。環境破壊は、人間が自らを「万物の霊長」と称して他の被造物よりも過度に高く位置づけ、自然環境を己の欲望のままに使ってよいと勘違いし踏みにじってきたことに原因がある。使徒パウロは人間の墮落以来、「被造物は虚無に服している」（ローマ8:20）「被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっている」（ローマ8:22）という表現によって、人間のおごり高ぶりの罪が環境を破壊し被造物を苦しめていることを言い表している。そして人間が環境を破壊することが自らの生活基盤をも崩し、自分で自分の危機をもたらす結果を招いてしまっている。

私たちは神様が人間に望まれた使命、つまり神様の僕として神様のみ心に基づいて地を治めるといふ本分へと立ち返る時、神のかたちに似せられたことをおごりの材料とせず、同じ土のちりから造られた他の被造物と連帯し平和的に関わるようにされ、環境破壊をもたらしたこれまでの生き方から解放されていく。 (吉田 崇)

テキスト 創世記 1章26～31節
カテキズム 子どもカテキズム 問15

〔単元のねらい〕

人間は、神に似せて、神のかたちに造られた。それゆえに尊いのである。この教えが、わたしたちをあらゆる束縛から自由にする。ここには福音がある。今日は、役に立つことが過度に求められ、効率が優先される時代となっている。「使えない」と言われて切り捨てられてしまうのである。しかし、そこに真の幸いはあり得ない。神を礼拝する幸いに生きる。そこに、人間存在の本質がある。その喜びを味わい、あるがままに神の御前に立ち、交わりに生きる者でありたい。

「人間ってステキだな！」

わたしたちは人間です。みんな人間です。何だ、そんな当たり前のこと。いったい何を言い出すんだと思うかもしれません。でも、わたしたちが人間であるということ、これは、とても不思議なことだと思えます。だって、わたしたちのだれひとりとして、自分が人間であると、そう思って自分で人間である人は、だれひとりとしていないのです。わたしたちは、ただ神さまが人間としてつくってくださり、神さまが人間であらしめてくださるから、みんな、人間であるのです。

何のこっちゃら？と思われるかもしれません。でも、人間であるって不思議なことなんだなど、そうあいつが言っていたと心に残ったら、それだけでもよいかもしいないと思えます。

人間って、とても不思議です。ほかの生き物、動物と、どんなところが違うと思えますか。いろいろと挙げることができますね。人間は、言葉を話すことができます。もちろん、動物も声を出して自分の気持ちを伝えています。最近では、植物も、いろいろな方法で自分の気持ちを周りに伝えているっていう研究があるようです。けれども、ただ食べ物がほしい、眠たい、危険だ！ というようなことだけではなくて、人間は、自分の気持ちや考え、希望すること計画すること、反省することなど、過去を振り返り将来に向かう、さまざまなことを言葉にして考え、伝えることができ

ます。だから、社会を築き上げることができます。あるいは、人間は道具を使うことができます。これも道具を使う動物はいろいろとあるのですが、とくに火を使います。ふつう、生き物は火を恐れます。火はすべてを焼き尽くしてしまうからです。けれども、人間は、その火をさまざまな仕方を利用して使っています。恐れを乗り越えて、火を役立たせます。そのもっともすごいのは、原子力でしょう。とてつもなく大きな力のある火を何とか利用しようと、人間は力を尽くすのです。

今日、大切に考えたいことは、とくに人間の特別なところがある、それは、神さまを礼拝すること、お祈りすることです。この神さまを礼拝し、お祈りする、そのことを学びたいと思うのです。

犬を飼っているお友だちはいますか。猫を飼っているお友だちはいますか。とてもかわいいですよ。犬も猫も、大切な家族の一員です。けれども、お祈りする犬っていますか。お祈りする猫っていますか。残念ですが、犬や猫は、お祈りすることはできません。神さまを礼拝すること、お祈りすることは、わたしたち人間だけに与えられた特別な恵み、幸いなのです。

神さまは、天地創造のみわざ、六日間のみわざの、その最後の日、第六の日に、人間をつくられました。それは、ほかの動物がすべてつくられて、その締めくくりとして、いちばん最後に、人間をおつくりくださったのです。そこにも、人間が特

別であることがあらわれています。そのため、人間のことを、「創造の冠」とか、「被造物の冠」と呼びます。「冠」って、王様がかぶる冠です。王様のすばらしさを、その頭に載せる冠があらわしています。そのように、すべての被造物の上に人間がいるのであって、人間がすべての被造物のすばらしさをあらわしている。そのような、創造の冠、被造物の冠なのだと言います。

けれども、それは、冠だ、すべての被造物の上にいるのだと言って、わたしたちが威張ってしまう、ほかのつくられたものを好き勝手にしてしまうということではありません。

聖書はこう言っています。26節、「神は言われた。『我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう』」。27節、「神は、ご自分にかたどって人を創造された」。「かたどる」というのは、かたちをまねるということです。お砂場道具に、乗り物や動物のかたちをしている入れ物がありますね。それに砂を詰めて、地面に伏せて、そして入れ物を取ると、砂が乗り物や動物のかたちになっていますね。かたどるっていうのは、そんなふうにして、かたちをまねることです。

聖書は、人間は、神さまのかたちをまねてつくられている。神さま御自身が、神さまに似せて、人間をつくられたのだと言います。かたちと言っても、それでは、神さまに人間のような手があり、足があるのか、そういうことではありません。

神さまが、この世界を愛し、人を愛して、世界と人をつくられた。そのように、わたしたちも神さまと世界を愛して生きていきます。神さまが、父と子と聖霊の愛の交わりに生きておられる。そのように、わたしたちも、神さまを愛し、人を愛して、交わりのうちに生きていきます。神さまが、この世界を愛して、ていねいに順序立てておつくりになった。そのように、わたしたちも、この世界を愛して、この世界に誠実に仕えて労働し、文化と社会を築き上げていく。

そのように、わたしたちは神さまと向かい合って生きる。神さまとの交わりに生きる。それが、かたどられ、似せられているということです。人間が特別な存在である理由なのです。人は、神さまを礼拝し、神さまに仕えて生きる存在です。この世界を、神さまの御心に従って、神さまと共に治める務めも与えられているのです。

人間は、ですから、神さまとの交わりに支えられて生きるのではないならば、本当には、生きることができません。神さまを礼拝することなく、本当に人として、人間として生きることなどできないのです。ところが、神さまを見失って、神さまを礼拝せずに生きてしまう、神さまなどおられないかのように生きてしまう。そのために、今、わたしたちは、さまざまな痛み、痛みを味わうことになっています。交わりが苦しみとなり、お互いの関係が引き裂かれて、たくさんの重荷を背負い込むことが起きているのです。

神さまは、人間とは何であるか、それを教えるために、主イエスさまを与えてくださいました。まことの人間として生きられたお方です。この主イエスさまをとおして、わたしたちは、人間であることを取り戻していくのです。主イエスさまを信じて神さまを礼拝するとは、人間であるということそのものなのです。

そして、わたしたちは、神さまに似せられているゆえに、尊い存在です。それは、病気であっても障がいがあっても、幼い子も高齢の方も、神のかたちであるゆえに、その存在そのものが尊いのです。そこに、人間の尊厳があります。

主イエスさまを信じて生きるとは、神さまとの交わりを回復して、人間であることを取り戻して生きることです。そのときに、わたしたちは、お互いの存在を本当の意味で尊び、尊敬しあうことができます。謙そんに生きることできます。主イエスさまを信じて、真実の人間とされて生きる、そのことを喜びましょう。(望月 信)

[今週の暗唱聖句] 創世記 1章27節前半

神はご自分にかたどって人を創造された。

〈ねらい〉

神と人とを愛して神の栄光を表すことを目的に、神の似姿として人間は創造された。「自分と同じように他者を愛する」ことに絞って考えてみた。

〈展開例〉

神さまは「光あれ」というお言葉で世界をおつくりになりました。空と海、太陽や月、山や川、花や木、象や蟻、鳥や魚、そういう全部のものを造られました。すごいですね。

さて、そうして最後に人間を造られました。だから人間は生まれたときから美しい空やお花があって、食べるものもあって、可愛い動物もそばにいてとっても幸せで楽しかったのです。神さまがどんなに人間を他のものより大切に考えていてくださったかが分かります。それだけではありません。人間を造るとき、神さまはご自分の息を吹きかけて神さまに似ている者として特別に造ってくださったのです。神さまに似ているということは、神さまとわたしたちの心が通じ合っているということでもあるのです。知らない人とお話する

よりも、お母さんやお友だちと色々お話をするときには楽しいでしょう？ それと似ています。神さまと何でも心からお話しできるように造ってくださったのです。だから、こうして礼拝ができるのです。動物は礼拝なんかしません。嬉しいですね。わたしたちをそんなふうに造ってくださったということは、ぼくやわたし、そしてお友だちも神さまからごらんになれば、大切な大切な人なのです。自分が嫌いなお友だちでも、よその国の知らないお友だちでも全部神さまの大切な人なのです。神さまが大切にしておられる命は誰にとっても大切な命です。いらぬ命は一つもありません。自分を大切にするように、どんなお友だちも大切にしましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、ぼくたちわたしたちを大切に造ってくださってほんとうにありがとうございます。だから、よその国のお友だちのためにも一生懸命お祈りできますように。イエス様によって、アーメン。

〈やってみよう〉**「輪投げ」をしてあそぼう！****○準備するもの**

新聞紙を細くまるめて輪にしたのをたくさん作っておく。

カラービニールテープで巻いておくと楽しいが、なくても良い。

○遊び方

子どもが投げる輪を、教師の腕で受ける。

ひとり二回ずつとか、(テープが巻いてある場合) 色別対抗で競うなど、色々なバリエーションを考えておく。

○しっかり作っておけば、備品になって、さまざまな場面で応用して使うことができます。

〈ねらい〉

神さまは、人間にだけ命の息を吹き入れてくださった。

〈展開例〉

粘土で、何かを作ったことのある子はいいますか？ 何を作りましたか？（自由に発言）

ここで、一緒に聖書を読んでみましょう。創世記2章7節。

《主なる神は土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。こうして人は生きる者となった。》

どんなことが書いてありましたか？

神さまは、土で人を作ったんですね。神さまは人を作ったあと、何をしたでしょうか？ 鼻に、命の息を吹き入れたのです。この命の息って誰の息ですか？ そうです、神さまの息ですね。神さまの息が入ったら、人はどうになりましたか？ 生きる者となったのです。

では、思い出してみましょう。

神さまは、他の生きるもの……空の鳥や海の生き物や地上の動物……を創ったとき、どうされましたか？ 言葉で創造されただけで、命の息は吹き込まれなかったですね。これは、どういうことだと思いますか？（自由に発言）

神さまは、人間を特別な者として造ってくださったのです。

聖書を読みましょう。創世記1章28節。

《神は彼らを祝福して言われた。》

神さまは、人間を祝福してくださったのです。他の創造物には祝福という言葉はありません。ですから、人間は神さまにとって、特別な存在なのです。神さまは人間を大切に大切に創造してくださったのです。だから、私たちは、自分のことも、お友だちのことも、家族のことも、教会の人たちのこともみんな大切にしなければなりません。神さまが大切に作ってくださった命を、大切にしましょう

〈祈り〉

神さま、私たち人間を特別に創ってくださりありがとうございます。自分のことだけでなく、お友だちのことも、そして家族のことも大切にしていけるように、守ってください。



〈ねらい〉

神さまは人間を「神のかたち」に造られたことを学ぶ。

〈展開例〉**○人間は「神のかたち」に造られました**

聖書にはびっくりすることが書かれています。神さまは人間を「神のかたち」に創造された、ということです。その意味は、わたしたち人間は神さまに「似ている」ということです。

しかし、残念なことは、聖書のどこを探しても、人間が「神のかたち」に創造されたということについての詳しい説明は見つからない、ということです。そのため、わたしたち人間は、それがどういう意味であるかを自分たち自身でよく考えなければなりません。

ただし、聖書に基づいてははっきり分かることもあります。それは、聖書のどこを探しても、人間以外の存在、たとえば動物や植物、宇宙や自然が「神のかたち」に造られたと書いているところは見つからないということです。つまり、聖書によると、「神のかたち」に創造されたのは人間だけであるということです。その意味で、神さまは、人間を他のすべてのものとは異なる特別な存在として創造してくださったのです。

○人間のどこが特別でしょうか

それでは、人間と他のすべてのものとはどこが違うのでしょうか。人間のどこが特別なのでしょうか。この点について今日は、三つのことをお話したいと思います。

第一は、わたしたち人間には神さまを信じること、礼拝すること、そして神さまに祈ることができるという点で、他のものとは異なる特別な役割を神さまから与えられているということです。つまり、神さまは人間を、いわば御自分の“話し相手”として、特別にお選びになったのだということです。

残念ながら私には人間以外の動物たちの言葉を

理解する力はないので、動物たちが神さまを信じてたり神さまにお祈りしたりできるかどうかを確かめることはできません。しかし私はそのようなことを深刻に考える必要はないと思っています。不真面目な考え方だと責めるつもりはありませんが、分からないことをいくら考えても何の答えも見つかりません。神さまの存在を知っているのは人間だけです。この点こそが、人間が特別な存在として創造された理由です。わたしたちは、そのように信じてよいのです。

第二は、わたしたち人間には、他のすべてのものを「治める」役割を神さまから与えられているということです。この場合の「治める」の意味は、お世話をすること、大切に守ること、管理することです。動物や植物、宇宙や自然を人間が勝手気ままに壊してよいとか殺してよいということではありません。神さまがこの世界と人間を心から愛してくださっているように、わたしたち人間もそれらのものを愛さなければならないのです。

第三は、第一の点と第二の点を合わせたことです。人間には、「神を愛すること」と「世界のすべてのものを愛すること」との両方を行うことができる“喜び”が与えられているということです。神さまは、天地万物を創造された後、それらすべてをご覧になって「ベリーグッド！」（素晴らしい！）と心からお喜びになりました。神さまは世界と人間が命ある存在となったことを喜んでくださいました。「神のかたち」とは、もしかしたら「喜びのかたち」かもしれません。わたしたちが罪から救われ、神さまと世界の人々と共に生きる人生を喜び楽しんでいるとき、そのわたしたちの姿は、神さまに最も似ているのかもしれません。

〈お祈り〉

神さま、わたしたちをあなたに「似たもの」にお造りくださったことを感謝します。わたしたちの心を、喜びで満たしてください。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

「神のかたち」について理解を深める。

〈子どもカテキズム〉

問15：神さまは人間をどのように創造されましたか。

答：神さまは、人間を神さまのかたちに似せて、男の人と女の人として造られました。土のちりから造り、神さまのいのちを吹き入れてくださいました。こうして、人間はただの動物ではなく、神さまとの交わりを持つものとされました。ですから、人間にとって生きるとは、神さまを礼拝すること、お友だちを愛することです。

〈展開例〉

1. 創世記1章から、人間の創造について確認する

○創世記の創造記事（1～2章）の中心点は、人間の創造にある。1章においては、「全被

造物の頂点・創造の御業の冠」として人間の創造について記され、2章においては、世界の中心（エデンの園）に人間が置かれている。

2. 「神のかたち」について考える

- 「神のかたち」とは何だろうか？説教を聞いて分かったことを発表しあってみよう。
- 墮落前の人間は、「神のかたち」を完全な状態で持っていたが、罪を犯したことにより、「神のかたち」は破壊されてしまった（なくなっただけではない）。
- 聖書は、特に、「神のかたち」を「知識・義・聖さ」と教えており（エフェソ4:24、コロサイ3:10）、「神のかたち」のものであるイエス・キリストの救いにあずかり、イエス・キリストに似る者となる時（ローマ8:29、ヨハネ一3:2～3）、再び私たちのうちから輝き出ようになる（コリント二3:18）。
- 真の「神のかたち」は、イエス・キリストの中に見ることができる。

